

年頭所感

一般社団法人 家畜改良事業団
理事長 富田 育稔



新年明けましておめでとうございます。皆様には、平素より家畜改良事業団の業務に格別のご理解とご支援を賜っておりますことに深く感謝申し上げます。本年も職員一同、生産者の利益向上を第一として努力してまいりますので、旧年にも増してご支援いただきますようお願い申し上げます。

昨年は、酪農では生乳価格が段階的に引き上げられ、生産者にとっては一息つけた一年となったのではないかと思います。肉用牛については、肥育経営にとっては引き続き厳しい一年でしたが、繁殖経営にとっては子牛価格が回復し、明るい兆しが見えてきたのではないかと思います。いずれにしても世界的なインフレと円安、飼料・燃料の高止まりなど畜産業界は依然として厳しい状況が続いています。

さて、例年の年頭所感では、当団の行う乳用牛、肉用牛改良の進捗や今後の方向性をお知らせしてまいりましたが、本年は当団業務をめぐる課題にも言及し、最近の家畜改良をめぐる環境変化を知っていただきたいと思います。

まず乳用牛につきましては、我が国酪農の生産性向上のためには、日本の気候風土に適した乳用牛の改良が必要であるとの信念の下、(独)家畜改良センターを中心に、(一社)日本ホルスタイン登録協会、(一社)ジェネティクス北海道、(株)十勝家畜人工授精所及び当団で乳用牛改良推進協議会を組織し、大学・研究機関等の支援も受けながら改良に取り組んでいるところです。具体的には毎年の改良計画を作成・公表し、当該計画に即した後代検定の実施により優良な検定済種雄牛を作出しています。また、ゲノミック評価(以下「G評価」という。)が進展したことから、検定済種雄牛のみならず、検定中のヤングサイアをも先行して利用できるようにしています。

しかし、このように国内関係者が一体となって我が国の飼養環境に適した種雄牛を作出しているにもかかわらず、国産種雄牛精液の販売シェアは年々低下しています。現在、国産種雄牛精液のシェアは4割を下回

っていると推測しています。国産種雄牛についても温暖化に対応した暑熱耐性や長命連産に重要な疾病抵抗性の評価が開始されたことから、酪農の生産性向上に大きく貢献できると考えています。我が国乳用牛の改良は、生産者の利用があってこそ進むものです。ぜひとも国産種雄牛精液の利用による乳用牛の改良推進にご理解をいただきますようお願いいたします。

肉用牛につきましては、G評価の進展により、枝肉重量、脂肪交雑、ロース芯面積、バラの厚さ、歩留基準値などいわゆる枝肉6形質について飛躍的に改良が進んでいます。特に脂肪交雑については、すでに十分な水準に達しており、脂肪交雑に代わって脂肪の質等新たな形質に着目した改良の必要性が指摘されています。これに対し、オレイン酸等の脂肪酸組成やきめ細かな脂肪交雑(小ザシ)を評価する取組みを積極的に行っており、脂肪酸組成についてはすでにG評価を公表し、小ザシについても早晚実用化できるものと考えています。ただし、これらの改良形質が生産現場に浸透するためには、その評価が枝肉単価に反映されなければならないと考えています。生産者の手取りは「枝肉重量×枝肉単価－生産コスト」で決まるからです。同様に、最近求められている肥育期間の短縮や早期出荷という取組みについても、そのことが「枝肉重量×枝肉単価－生産コスト」に当てはめて所得増加につながるものが重要です。当団の行う肉用牛改良は、こうした視点を忘れずに、今後とも生産者所得の最大化を目指して取り組んでまいります。

ここ2、3年、酪農も肉用牛も戸数の減少割合が拡大し、飼養頭数も大きく減少しています。経営環境の悪化や担い手の減少が原因であると思われますが、畜産は我が国の食と地域を支える重要な産業であり、今後とも関係者一体となって振興することが必要です。

最後に、本年が畜産業界にとって明るく、皆様にとって良い年となりますよう祈念して年頭のご挨拶いたします。